



## JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 42 回 日本語教育方法研究会  
横浜国立大学  
2014 年 3 月 15 日 (土)

記録的大雪の中、皆様いかがお過ごしですか。3 月 15 日に横浜国立大学で第 42 回研究会を開催いたします。今回の発表申込みは 53 件ありました。20 周年記念研究会に並ぶ発表数で、今回の研究会も、貴重な意見交換の場となることが期待されます。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 川村よし子

TABLE 1 第 42 回研究会開催について

日 時 :	2014 年 3 月 15 日 (土)
会 場 :	横浜国立大学教育人間科学部 7 号館 1F
開催委員 :	河野俊之 (横浜国立大学) 金庭久美子 (事務局、横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付 (発表者・一般) ポスター貼付	1:30	総会
10:00	開会の挨拶	2:00	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	3:10	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:40	ポスターセッション終了
11:10	ポスターセッション開始	5:00	講評
12:40	ポスターセッション終了 昼食・休憩 (弁当各自持参) 午後のポスター貼付		次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け
		5:30	懇親会

### 【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (p.15 参照) にご協力ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

## 【プログラム】

### 【午前の部】

#### ●口頭発表（5件）

##### 1. 教室内言語調整の練習支援システムの開発と形成的評価

歌代崇史（北海学園大学）

本研究の目的は、日本語教員を目指す学生、あるいは教授経験の少ない新人の日本語教員が、教授対象となる日本語学習者の能力レベルに応じて、教室内の言語調整を行う能力を向上させることである。この目的を達成するため、任意の教科書とその進度に応じて教室内の言語調整の練習ができる web システム Teacher Talk Trainer (T3) を開発した。効果検証の結果、T3 を使用した言語調整の練習をすることにより、学生の教室内言語調整に関する自己認識が向上することがわかった。さらに、効果検証では実験参加者が T3 を使用した感想を自由に記述し、システム自体の評価を行った。本発表では自由記述により収集したデータを分析しその結果を報告する。

##### 2. 視覚障害をもつ日本語学習者への指導の工夫—教授法と教材教具—

北川幸子（京都外国語大学）・辻野美穂子・古澤純（京都外国語大学大学院生）

視覚障害をもつ日本語学習者が、通常の日本語クラスに入って他の学生とともに学ぶ上で必要となる学習面のサポートを、1学期間教室の外から行ってきた。教科書などの紙媒体の教材をコンピューターの読み上げソフトで使用できるようデータ化し、レリアや立体模型など、手で触れられるものを中心に、教材教具を工夫した。また教授法の面でも、イラストなどによる動機づけや、タスク全体像の把握など、通常視覚情報によって理解するところを別の形で補えるよう配慮した。今回、その1学期間の試みを振り返り、今後の課題を検討する。

##### 3. 中級日本語学習者への「LTD 話し合い学習法」の適用—活動性を高める授業実践—

森山仁美（久留米大学大学院生）

本研究では、「LTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法」(以下、LTD) を日本語教育の読解授業に適用し、活動性を高めるのに有効であるかどうかを検討した。LTD とは協同学習の一技法であるため、仲間同士の対等な話し合いを通して参加者一人一人の学習と教材の理解を深めることを目的としている。今回、中級学習者を対象に LTD を適用した結果、話し合いを活性化させ、話題に対して学習者一人一人が考えを深めることができた。これまでの教師主導型の Q&A のやり取りが中心の読解の授業と比較すると、LTD を適用した授業では学習者が積極的に自分の意見を述べる様子が見られた。

##### 4. オンライン日本語テキスト語彙分析器 J-LEX

松下達彦（東京大学）

行政サービスなどのやさしい日本語、多読のための graded readers 開発、内容重視の日本語教育などのためには、語彙レベルを適切に調節するリライトが欠かせない。本研究では「日本語を読むための語彙データベース」(松下 2011) の語彙頻度データに基づき、オンライン日本語テキスト語彙分析器 J-LEX が開発された。これは、テキストを入力ウィンドウに入れてクリックするだけで、語彙頻度プロファイル(頻度レベル別のテキストカバー率の分布表)、および指定した語彙頻度レベル外の語彙を赤でハイライトした解析結果を返すものである。これにより、テキストの語彙レベル判定およびリライトのための語彙レベル調節が飛躍的に容易になることが期待される。

##### 5. 学習者の事態把握を考慮した絵教材の作成にむけて—日本語学習用絵教材と描写文の比較から—

伊藤創（関西国際大学）・藤浦五月（武蔵野大学）

近年、多くの研究で、事態の把握の仕方は言語によって異なることが指摘されている。日本語は事態を経験者の目から描く「主観的事態把握」に基づいた表現を多用し、英語は経験者の目を離れ、俯瞰的に事態を眺める「客観的事態把握」に基づいた表現を好むとされている。本研究では、教室で用いられる絵教材から意図した文型や表現が導けないという問題に注目し、絵教材の描写実験を行った。日本語学習者による描写実験の結果、事態把握の違いが、問題の要因の一つであることを導き出した。本研究結果から、より自然かつ正確に導く絵教材のあり方を提言したい。

## ●ポスター発表（上記5件を含む27件）

### 6. 中国における日本語スピーチ大会の改善に向けて—参加者の声から考えるフィードバック形式—

菅田陽平（華東師範大学外国語学院）・潘寧（大阪大学大学院生）

筆者は中国国内のスピーチ大会の日本語指導に関わる中で、大会運営者側から参加者に順位付け以外のフィードバックが行われていない状況に注目した。本研究はフィードバックに対する参加者の考えを解明するために、スピーチ大会の参加者6名にインタビューを実施した。その結果、「学んだ日本語を発表し、自らの力を試したい」という点で全員の意見が一致した。そこで、参加者の能力が明確に示される技能別コメントシートの導入を提案したい。この技能別コメントシートは参加者および指導を行う教員の振り返りを促すことを目的としたものである。今後は参加者と教員を対象にした質問紙・面接調査を実施し、フィードバック形式の充実を図りたい。

### 7. 日本事情クラスで行った「防災を考えよう」の実践報告

松本明香（東京立正短期大学）

東日本大震災後、防災教育の必要性は高まっている。だが留学生に対する防災教育はなかなか進まない。そこで筆者は2013年度前期の日本事情クラスで「防災を考えよう」という実践を試みた。本クラス内で学生達は日本の災害、防災システムを学び、最終的に自身が居住する街を歩き観察することで防災の観点から社会を見つめ直す作業を行い、クラス内で口頭発表した。そこから防災に対する主体的態度の萌芽、そして社会の一員として他者との共生に向かう姿勢の現れが確認された。

### 8. スマートフォン時代の教材設計における「観察」の重要性

角南北斗（フリーランス）・中川健司（横浜国立大学）・齊藤真美（関西国際大学）・布尾勝一郎（佐賀大学）

紙教材にはない使い勝手を持たせることができるスマートフォン向け教材だが、それゆえその設計には、紙とは違ったノウハウも求められる。特に自身がスマートフォンを使い慣れていない教師にとっては、普段から道具として使いこなす学習者との利用感覚のズレが生まれやすい。また、教師が無意識に紙メディアに縛られた授業設計をしてしまい、学習者のスマートフォン活用を妨げている場合もある。このような状況から脱し、より良い教材を作るには、学習の場を改めて観察するステップを開発プロセスに設けることが必要になる。本発表では、教材「介護のことはサーチ」の開発事例を挙げながら、観察が設計にどう結びついたかについて考察する。

### 9. 中級前半レベルの学習者の読みへの取り組み—アンケート調査から—

鄭聖美・高橋純子（筑波大学留学生センター）

2012年度、筑波大学留学生センターにおいて中級前半レベルの学習者を対象に、教材および読解指導の適正化を図る目的でアンケート調査を行った。学習者が普段どのような読み方をしているのか、読解で困難と感じる要因、困難に遭遇した時の対処の仕方、どのような教材を期待しているかを問うた。回答者72名は同じレベルで、20名は留学生センターのレベル分けにより、一段階低いレベルであった。この72名と20名では回答の違いが見られた。そこから、学習者の日本語レベルが低いほど、学習者の興味を引き、比較的容易に読み進められる多読教材を用意する、語彙の負担を軽減する工夫をする、などが必要だとわかった。

### 10. Moodle を活用した日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツの開発と授業評価—「言語と教育」から「社会・文化・地域」まで—

篠崎大司（別府大学）

本研究は、篠崎（2013）で開発した Moodle を活用した日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツにさらなる改良を加え、それをもとに行ったブレンディッドラーニングによる授業実践と、受講生による授業評価の結果を報告するものである。具体的な改良点は以下の3点である。1. 講義資料（PDF）の内容を再検討し、必要に応じて内容をさらに充実させた。2. コース途中より「質問箱」を設け、次回の授業でフィードバックし、学習上の疑問点の解消に努めた。3. サブコンテンツとして紹介している授業に関連したサイトや動画を見直し、必要に応じて差し替えた。

## 11. 東京オリンピック 2020 と日本語教育

清水泰生 (マスタースポーツ科学研究会)

昨年9月のIOCの総会で東京五輪2020開催が決まった。決まって間もなく経済学、地方自治学等の分野ではその分野での展望や課題について議論されている。しかし、私が知る限り日本語教育などの言語関係の分野ではそれらの議論は、ほとんどない。本発表で東京オリンピック2020開催決定によって日本語教育がどうなっていくのか、また、日本語教育の貢献・課題等は何かを過去の日本で行われた世界スポーツイベントや万博などを踏まえながら述べてみたい。特に東京五輪2020日本語教育の鍵となりそうな分野、遠隔地教育、観光日本語、日本語体操の分野を見ていきたい。

## 12. 上級文法学習と既習項目復習のための授業—学生が主体的に考え学び合うことを目指した実践の報告—

平山允子 (日本学生支援機構東京日本語教育センター)

①上級文法学習において、学生が主体的に考え、集団で学び合うこと、②上級文法学習の際に提示する例文を再利用して、既習項目復習の機会を持つことを目的とした授業実践について報告する。市販教材を参考に作成した学生用冊子1種と教師用スライド2種を用いた授業の中で、学生たちは目標文法を含む例文のディクテーション、目標文法の意味・接続・使用制限等の推測、与えられた語群からの例文再構築(既習項目の知識も活用)、練習問題への解答といった活動に取り組んだ。学生たちは筆者からの質問に自ら考えて答え、上級だけでなく初級・中級の知識も動員しながら協力して課題に取り組み誤用訂正をし合っており、目的①②は達せられたと考える。

## 13. 文章の登場人物の感情や意図を学習者はどのように解釈しているか—キーワードに焦点を当てた協働作業を通して—

衣川隆生 (名古屋大学)

中上級日本語学習者を対象とした読解授業において、新聞のコラムを題材にして、文章中のキーワードから登場人物の感情や意図を読み取る協働作業を行った。まず学習者は個別に文章から印象に残ったことばをキーワードとして選び出す。次になぜそのキーワードを選んだか、そのキーワードの背後にはどのような登場人物の感情や意図があると感じたのかをグループで話し合う。グループでの対話を分析した結果、キーワードの選択、キーワードから読み取る感情や意図は多様であること、対話を通してそれぞれの解釈を共有することにより、登場人物の感情や意図についてのより深い理解を構築していることがわかった。

## 14. 学習者が体得したスキルを伝える「グループワーク虎の巻」の作成と活用—協働学習を取り入れて中級教科書の学びを深める試み—

西山友恵・久野由宇子 (東海大学国際教育センター)

グループワークのコツを記した「虎の巻」は、それを経験した学習者の語りを編集したものである。筆者らは、教科書を用いた中級学習に協働学習の理念に基づくグループワークを取り入れることにより、語彙表現のより深い学びと積極的な運用を目指している。対話により理解を確認し補い合って学習を進める仕掛けを教師が設計するのに応じて、学習者がグループワークをどのように遂行し、またどう評価したか、観察と聞き取りを行った。その結果、学習者自身が試行錯誤の中から体得した具体的な協働のスキルや注意点が数多く浮かび上がってきた。これらは後輩学習者にとっても有効と考え、引き継ぎを試みている。

## 15. 超級話者のアクセントとルール

河野俊之 (横浜国立大学)

日本語のアクセントは恣意的であり、それらを身に付けるには、ひとつひとつ覚えるしかないと言われる。しかし、母語話者がアクセントを獲得する際、全て個別に覚えているとは考えにくい。そこで、本研究では、旧日本語能力試験出題基準語彙表の一部について、語種や拍数などの観点からアクセント型の分析を行った。その結果、「教育」「方法」「研究」などの2+2拍の漢語は平板型が圧倒的に多いこと、「工事」「公示」などの2+1拍や「意見」「違憲」などの1+2拍の漢語は頭高型か平板型がほとんどであることが分かった。これらのルールを明示的に提示することにより、動詞やイ形容詞と同様に体系的な教育を行うことが有効だと考えられる。

## 16. 訂正フィードバックに対する意識と教室での実態—キルギス共和国の日本語教師の場合—

渡部裕太（国士舘大学大学院生）

キルギス共和国の日本語教師を対象に教師が授業中に用いる訂正フィードバックの実態とその意識を明らかにするため、授業観察と意識調査（フォローアップインタビュー、質問紙調査）を行った。授業観察からは「明示的訂正」が最も多く見られた。その理由として、学習者に不自然な日本語発話だった箇所を気付かせることができ、間違いを明確に指摘できるという意見が教師から挙げられた。質問紙調査からは、教師が意識下で好む訂正フィードバックは「誘導」が示された。なぜなら、学習者に再度発話する機会を与えられることに加え、間違いを指摘しやすいからである。両調査の結果から、教師は学習者の情意面に配慮した訂正フィードバックを与えることが明らかになった。

## 17. 論述文の添削評価を学生はどう受け取るか—効果的な添削指導法の構築に向けた一考察—

中林律子（東京福祉大学）・山本裕子・本間妙（中部大学）

学生に自身の論述文の問題点に気づかせるにはどのような添削が効果的なのかを検討するため、大学生（日本語母語話者）の論述文に対し添削評価を行った。評価は点数・コメント附与から成り、コメント附与は形式面のみ行うグループと内容面のみ行うグループの二つに分け、学生の気づきを比較した。その結果、形式面については減点のみでは問題点を意識されにくい、コメントがあれば適切に問題点を理解する割合が高いことがわかった。一方で、内容面については減点のみでも問題点を意識されやすいものの、コメントが附与されていても問題点を適切に理解できない割合が高かった。以上の結果は日本語学習者の作文指導にも反映しうるものと考えられる。

## 18. ディベートの先を考える—ディベートからアサーティブなディスカッション、スピーチへ—

川崎一喜（立命館大学）

ディベートは、論理的思考力や情報収集・分析力等、大学での学びに必要なスキルを獲得するための有効な手段とされ、現在、多くの大学の日本語教育に取り入れられている。しかし、ディベートで得たスキルをいかに活用するかについては、まだ研究の余地がある。また、ディベートは競技という性格上、コミュニケーション面での問題も指摘されている。そこで発表者は、留学生の聴解口頭表現のクラスに於いて、ディベートで得られたスキルにアサーション・スキルを加え、ディスカッション、スピーチにつなげていくという、「ディベートの先」の実践を試みた。本発表はその活動内容並びに成果と課題を報告するものである。

## 19. 「伝わる話し方」への気づき—ラジオ番組づくりを取り入れた授業の実践を通して—

森川尚子（早稲田大学日本語教育研究センター）

本研究では、コミュニケーションにおける言語要素の役割に集中させるため、文字・映像の補完がなく音声のみのコミュニケーションメディアであるラジオの特性に着目し、番組づくりの実践を試みた。ラジオの話し手には、聴き手への伝え方において、多くの技術と配慮が要求される。学習者自身がパーソナリティとなり、音声のモニターや仲間とのピア・レスポンスを通じ、考えながら工夫することで、自分の発話意図や内容をできるだけ正確に相手に届けるために何をすべきか、様々な気づきがあった。ラジオには、今後、より実践的な日本語コミュニケーションを学ぶ場合の活動素材として、「伝わる話し方」を目指すための幅広い可能性が期待できる。

## 20. 専門学校でのNIE授業と協働学習

富並美希（中央工学校）

本研究では専門学校の留学生に対して1年間のNIE授業を行い、記述アンケートと個別インタビューを通して学習者の意識を明らかにした。その結果、身に付いた能力として発音、読解力、発表能力が挙げられた。また、役に立った授業内容としては新聞作成が挙げられた。以上のことから、本研究における学習者は「話す能力」に関心があり、受け身の姿勢ではなく自分から日本語を発信し、学習者同士が協力し合い、一つの作品を完成させるというNIEの新聞作成の過程で協働学習の効果が認められたと考える。

## 21. 習熟度別クラス分けによる日本語聴解授業の試み

袁秀杰・劉宇楠（ハルビン理工大学）

日本語を主専攻とする中国のある大学の日本語学習者109名を、学期末の聴解テストの結果により、初級、中

級、上級の三つのクラスに分け、習熟度別クラス分け聴解授業を実施した。期間は、二年生の前期から三年生の前期までの3学期間である。クラス分け前と後の聴解テストの得点の差をもとに、習熟度別のクラス分け授業が初、中、上級クラスの学生に及ぼす影響について考察した。その結果、二年前期一回目の授業で実施した三つのクラスの成績の変化には差異がなく、二年後期二回目においては、初級クラスは、ほかの2クラスと明らかに異なり、三年前期三回目においては、上級クラスと初級クラスの間のみ、差異があることが明らかになった。

22. 日本語学習者へ向けた語の意味特徴の分析—動きのメタファー「ころぶ」と「つまづく」の考察から—  
松浦光・梶原彩子（名古屋大学大学院生）

「ころぶ」と「つまづく」は、基本的な意味においては「障害物となるものに妨げられる」という似た事態を指すことができる。しかし、メタファーの意味においては、どちらか一方のみに成立が許されるといった意味の実現にズレが生じる。そこで、概念メタファー<<活動は移動>>を用いて、移動の妨げと経路の観点から「ころぶ」と「つまづく」を考察する。「つまづく」ことは「たおれる」ことが含意されず「障害」によって進行が一時停止し、遅れることが分かる。一方で、「ころぶ」は、「たおれる」ことが含意されるが「障害」によって「経路」の方向が変わることが伴う。移動の妨げと経路という捉え方を概念メタファーから理解することが意味の理解に有効であると本稿では提案する。

23. 「5文スピーチ」活動の可能性と課題

木村亮子（東京外国語大学留学生日本語教育センター）・足立尚子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

本発表では、初級後半から3か月間行った「5文スピーチ」活動の実践を報告し、その成果と課題について考察する。活動終了後に実施した到達度調査を分析した結果、身近なテーマについて簡単な発表ができるようになり、接続詞や指示詞を使ってまとまった話ができるようになったことが確認された。アンケート調査の結果からは、5文スピーチを口頭表現練習として肯定的に評価している学習者が多いことが分かった。また、①簡潔に伝えること、②文と文の結束性・話全体の構成、③接続詞や指示詞の適切な使用、④聞き手に対する配慮の4点において意識化が促されている可能性が示された。

24. やさしい日本語文作成のための複合名詞書き換えシステムの試作

足立圭汰朗・北村達也（甲南大学）・川村よし子（東京国際大学）

本研究では、複合名詞を書き換えることによって日本語学習者の文章読解を支援するシステムを開発した。ここでは漢字熟語が2語組み合わせさせたものについて扱う。例として「変更計画」、「変更結果」という二つの複合名詞を挙げる。これらを書き換えると「変える計画」、「変えた結果」となり、後半の「計画」、「結果」によって前半部分をそれぞれ現在形、過去形に書き換える必要があることが分かる。本研究では、検索エンジンを利用して自動的にこの判定を行う手法を開発した。なお、語句の意味は辞書サイト Wiktionary から取得した。本研究によって、入力文章中の複合語を自動的に抽出し、必要に応じて書き換えるシステムの開発ができた。

25. 総合日本語クラスで音声を専門としない教師はどのように音声指導を行い、学習者はどう受け止めたか—学習者の意識化を促すための教材を使用して—

野口英美・渡部みなほ・田川恭識（早稲田大学日本語教育研究センター）

筆者らは音声指導に特化しない、いわゆる総合クラスにおける音声指導の必要性を主張し、音声を専門としない教師でも日常的に短時間で行えるよう配慮した教材を開発してきた。本教材は音声を教えるのではなく、学習者への意識付けを目標としている。本発表では、音声を専門としない教師2名が、本教材を用いて行った初級クラスでの1学期間の実践記録と、学期後半に行った学習者の発音への意識に関するアンケート結果の分析を通し、総合クラスにおける音声教育について考察する。調査から、クラスでの具体的実践が明らかになり、学習者の意識化の過程も観察されたが、学習者の発音への意識が教師の意図と必ずしも合致するものではないこともわかった。

26. 「うんちをしますか？」と言いますか？—介護の日本語教科書から、排泄介助場面の待遇表現に注目して—  
大沼敦子（コロンビア大学大学院生）

インドネシア、ベトナム、フィリピンから介護福祉士・看護師をめざして来日した外国人の国家試験合格率の低さが問題となっている。その理由として多くの先行研究によって、コミュニケーションの難しさが挙げられているが、中でも人間の尊厳に関わる排泄場面はキーポイントであろう。まず、医療従事者同士で使う専門用語と、非介護者と話す一般用語に隔たりがある。さらに、日本語で排泄は隠語で示されることが多く、日本独特の習慣や言い回しになじまないために日本人患者との間で不要・無用な誤解を招いたり、モチベーションを失ったりするケースもある。そこで、本研究では、今後のより効果的でわかりやすい学習の一助をめざし、排泄介助場面での声かけにしばり、外国人向け日本語教材の例文と語彙の揭示例を分析した。

## 27. 漢字圏学習者を対象とした漢字音「再学習」支援のための授業デザイン—中級学習者向けコース4日間の実践から—

藤田朋世・渡部みなほ・増田真理子・前原かおる・副島昭夫\*・野口真早季・菊地康人（東京大学日本語教育センター・麗澤大学外国語学部\*）

漢字圏中級学習者を対象とした、日本語としての漢字音「再学習」のための授業デザインを、実践を踏まえて紹介する。これは、「漢字熟語を正しく読むには、①単漢字としての読み（基本音）と、②特定環境での音交替規則（例「失敗」における1字目の促音化や2字目のh/p交替）の把握が不可欠である」（増田他2013、前原他2013a, b）との知見に基づくもので、具体的には、学習者がまず「語レベルで覚える従来の学習方法の限界」を知った上で「基本音の存在」「音交替規則の存在」「具体的な音交替規則」を意識化できるよう設計した。その際、知識の一方的伝達を避け、「熟語カードを並べて表を完成させていくタスク」等を通じて学習者自身の気づきを促した点も大きな特徴である。

### 【午後の部】

#### ●口頭発表（5件）

## 28. 初級日本語学習者のための「つながり」を目的とした遠隔授業の実践

澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）・渡辺文生（山形大学）

本研究は、ソーシャルネットワークワーキングアプローチ（當作2013）にもとづいて、韓国の高校生の初級日本語学習者を対象に行った遠隔授業の実践報告である。遠隔授業では、韓国の初級日本語学習者と異文化コミュニケーションに興味を持つ日本語母語話者の教室内における対面でのやりとりだけでなく、さらに教室外におけるソーシャルネットワークワーキングサービス上での交流も促した。アンケートの結果によると、日本語母語話者との接触の機会が少ない海外の日本語学習者には、初級の段階から日本語母語話者との「つながり」を構築させ、できるだけ日本語使用の機会を与えることが、意欲的な日本語学習へのきっかけになることが分かった。

## 29. 中国語母語話者の日本語漢字書字能力の実態から示唆されること

向井留実子（東京大学）・串田真知子（桃山学院大学）・高橋志野（愛媛大学）

中国語母語話者の漢字教育と言え、語としての読みや用法の指導が中心となり、字形が優先的に取り上げられることは少ない。一方で、中日で異なる字形の指導の必要性を指摘する論考は多いものの、いまだ、具体的な指導方法は検討されていない。そこで、本研究では、指導検討の資料を得るため、初級終了以降の中国語母語話者を対象として日中で字形の異なる漢字の書字能力を調査した。その結果、母語からの干渉など習得上の問題が浮き彫りになった。また、字形の想起にあたっては、語彙知識が影響していることが観察され、字形単独での指導ではなく日本語習得と平行した段階的指導を行う必要があることも示唆された。

## 30. 中国人学習者に対して漢字語の「音」と「意味」の連結を強化する方法

孫淵（早稲田大学大学院生）

中国人学習者が母語の漢字知識を強みにし、日本語の読解が得意な一方、漢字の表記への依存が故に、漢字語の「音」と「意味」との連結が弱くて聴解が苦手である。中国の教育現場において、語彙教育は漢字の表記の提示が多く、「音」の提示が少ない。それゆえ、漢字語の「音」と「意味」の連結が弱くなる一方である。その連結を強化するために、新出漢字語を導入する際に、漢字の表記をどのように扱えば良いかについて実験とアンケート調査を行った。その結果、意味のある音声インプットを与え、漢字の提示を後回しにしたほうが有効的であ

り、聴解の上達につながる方法であることがわかり、教育現場への実践に十分な可能性が示唆された。

### 31. 留学生の就活を支える面接指導の実践

齊藤紀子・荒木裕子・馬場真知子（東京農工大学国際センター）

本研究は留学生の就職活動を支援するクラスとビジネス日本語の指導を行うクラスが合同で就職面接の指導を行った実践の報告である。クラスでは就活を専門とする講師と日本語を専門とする講師が協働して面接準備の指導を行い、その後模擬面接を実施し、フィードバックを与えた。また、学習者同士及び学習者自身の振り返りによる評価も行った。実践の結果、留学生への就職面接指導においては、適切な情報の提供、発想の転換の促し、また言語運用面での支援が必要であることが観察された。2名の講師による異なる観点からのフィードバック及び自己・他者評価は、学習者に面接を改善するための様々な気づきを促すことも認められた。

### 32. 語彙学習アプリ教材の使用感調査—大学での学習を支える語彙力育成を目指した教材開発に向けて—

岩下真澄（活水女子大学）・石澤徹（山口福祉文化大学）・伊志嶺安博（長崎外国語大学）・桜木ともみ（国際基督教大学）・松下達彦（東京大学）

本研究は、開発中のアプリ教材を1週間試用した際の学習者の使用感について分析し、アプリの改善および更なるアカデミック日本語教材開発に役立てることを目的とする。当アプリは、大学での講義を理解するために必要な語彙力の育成を目指したもので、日本語での語釈を読んでターゲット語を答える練習課題を含んでいる。質問紙調査の結果、収録語彙の有用性と練習課題の提示方法について高い支持が得られ、反復練習や時間の有効活用に関してよい評価が得られた。また、収録語や定義の音声提示などの要望があったため、より自律的・効率的な学習環境の提供に向けて、今後検討していく。

### ●ポスター発表（上記5件を含む26件）

### 33. いかにしてウェブ教材の存在を学習者に知ってもらおうか—漢字学習ウェブサイト「介護の漢字サポーター」広報上の課題—

中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・齊藤真美（関西国際大学）・布尾勝一郎（佐賀大学）

IT化の流れの中でウェブ教材は今後日本語学習においても自律学習の要となる可能性が高い。特定の機関向けではないウェブ教材は、想定される学習者に存在を知ってもらい活用してもらうために広報活動が必要である。書店での陳列や出版社による宣伝が期待できる紙媒体の教材と違い、ウェブ教材は広報手段がウェブに限られることが多いが、学習者の大多数がウェブを活用している現在でもなお、対象とする学習者にその教材の存在を知らせるのは困難である。本発表では、ウェブ教材の広報のあり方を考察することを目的として、漢字学習ウェブサイト「介護の漢字サポーター」の開発前、一般公開時、公開後の広報活動における課題について報告する。

### 34. ブックレポート形式の口頭発表に見られる日本語学習者の問題点—わかりにくさの原因を考える—

大津友美・八木真生（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

学部教育課程では、ゼミなどで口頭発表を課されることが多い。その代表的な発表形式に、読んだ文献の内容をまとめて紹介する「ブックレポート」形式の口頭発表がある。自分の中にあるものを主な材料として構成するスピーチとは異なり、文献中の情報を自分なりに消化したうえで、口頭発表に再構成しなければならないため、わかりにくいものになってしまうケースが多い。そこで、筆者らは、わかりにくさの原因を明らかにすることを目的に、学部進学予備教育課程の学生によって、実際に行なわれたブックレポート形式の口頭発表の録音データを分析した。本発表では、その結果を報告するとともに、指導の改善のための方針についても述べたい。

### 35. 話しことばをめぐる教材開発への一提案

才田いずみ（東北大学）

学習者の口頭コミュニケーション能力を高めるために、本物の話しことばや、現実に近い話しことばを含むドラマや映画などを教材リソースとすることは、以前から広く行われてきた。しかしながら、実際の話しことばの中には、教材としてはこれまでほとんど扱われてこなかった要素が多数ある。その一例が、近年、日本語学研究で取り上げられている役割語である。役割語は、日本語教育教材の中では、ほとんど無視されてきたと言ってよ



い。本発表では、こうした側面を教材として扱うことの意義について、ウェブ上のビデオクリップにアクセスする形で作成した教材にも言及しつつ論じる。

36. 日本語複合動詞の習得実態の調査研究—中国における日本語専攻大学生を対象に—

劉宇楠・袁秀傑（ハルビン理工大学）

複合動詞の使用は学習者の日本語能力を評定する重要な条件である。本発表は中国のハルビン理工大学における日本語専攻の3年生を対象に、複合動詞の習得状況について調査を行った。調査の結果、統語的複合動詞より語彙的複合動詞の習得が困難であることが判明した。日本語レベルが高い学生ほど後項動詞がアスペクトを表す統語的複合動詞、前項も後項も独立した意味を保持する語彙的複合動詞、前項と後項の中に一つだけ独立した意味を持つ語彙的複合動詞の習得状況が良い。今回の調査で得られた結果を今後の教育に役立てたい。

37. 「生活者としての外国人」の日本語学習と社会参加—就労者の事例から—

中尾菜穂（筑波大学留学生センター）

本研究では、半構造化インタビューを用いて、すでに日本語習得と社会参加に成功していると考えられる「生活者としての外国人（以下「生活者」）」の事例から、①「生活者」はどのような学習方法によって日本語力を向上させてきたのか、②「生活者」の日本語学習と社会参加にはどのような関係があるのか、の2点を明らかにすることを課題とした。3名の就労する「生活者」の事例においては、彼らが自然習得だけではなく自律学習を行いながら日本語力を向上させていること、また社会参加はその日本語学習の目標としてだけではなく、きっかけや学習方法としての役割を果たしていることが示された。

38. 日本語を母語としない成人学習者に対する音声教育の実践報告

市川章子（横浜国立大学大学院生）

本研究は、音声教育の実践報告である。実践開始にあたり、学習者に行った聞き取りから、日本語学習者は、アクセントや拗音、ラ行音の発音に対し苦手意識を持ちながらも、それらに焦点をあてた授業を受ける機会が少なく、改善できずにいることがわかった。毎回の実践で正しい発音を提示し、それに対する聞き分けと言い分けを行った。学習者が音を聞いた後、頭の中で何を考えていたのかを明らかにした。実践終了後、音声教育に対する学習者の考えを聞いた。その結果、学習者が音声教育を望んでいる実態が示された。

39. 外国語教育における学習基準の分析—「文学教材」に焦点をあてて—

リッチングス・ヴィッキー・アン（関西学院大学）

本研究の目的は、文学教材の日本語教育における位置付けを把握し、その使用可能性を検討することである。本目的の達成に向けて、三つの学習スタンダード（JFスタンダード、CEFR、ナショナル・スタンダード）における教材としての「文学」の位置付けに焦点をあて、それぞれの基準における「文学」の学習目標は何かを考察し、日本語教育における文学教材の意義について考える。調査した結果、1) 教材としての「文学」に関する学習基準が存在し、2) 具体的な学習目標が示され、3) 使う価値が十分にあることが明らかになっているが、具体的な教授法が提供されているわけではない。文学教材をもっと普及させるためには上述した課題に取り組む必要がある。

40. 中・上級学習者による日本語短母音の誤聴傾向に関する一考察—中国語北方方言母語話者による3モーラ無意味語聴取の事例から—

栗原通世（国士舘大学21世紀アジア学部）

短母音のみで構成される3モーラの無意味語を日本語中・上級レベルで国内在住の中国語北方方言母語話者に聴取させた結果より、語のアクセント型や音節構造が母音の長さの判断に与える影響を考察した。語単独およびキャリア文を用いた条件で短母音の同定課題を行った結果、次の可能性が見出された。(1) 語頭や語中ではH（高音）拍の短母音が誤聴されやすく、特にアクセント核があるH拍でこの傾向が見られる。(2) 撥音を含む語では、CVNがCVRNのように撥音が後続する短母音が長母音として判断されやすい。これらはかなり高い日本語能力をもつ学習者であっても短母音を誤聴しやすい条件であり、教師による指導が必要なものとして考えられる。

41. 旧「満洲」における日本語学習者の日本観形成の一要因

伊月知子（愛媛大学国際連携推進機構国際教育支援センター）

本発表では、旧「満洲」時代に初中等教育機関で使用された日本語教科書を取り上げ、教科書が伝える日本・日本人に関する情報が、学習者の日本観に影響を与えているという観点から、教科書中の教材（題材）について分析を行った。その上で「皇民化教育」と言われる旧「満洲」の日本語教育において、教科書が与えた学習者の日本観形成への影響の可能性を検討した。また、「満洲国」建国後、「皇民化」の方針が強化されていく中で、当時の日本語の授業内容や教授方法について現場の模索や葛藤の過程をたどるために、教師や学習者の残した文献をもとに考察し、その過程の一端を明らかにした。

42. 自然会話と教科書との繋がり—教室内外での日本語学習者の助詞「ネ」の使い方の相違—

ポール・ガニア（スタンフォード大学大学院生）

円滑なコミュニケーションを行うためには用途が広い助詞「ネ」を使いこなすことが重要である。日本語学習者が「ネ」を習得するために、教室での構造的会話練習だけではなく様々な自然な状況での会話練習が必要だとされている。しかし、学習者の「ネ」の使い方が環境によりどのように異なるのか明確ではない。そこで、本研究では、日本語学習者4名を対象にして教室内と学校の部活での会話の録音を行い、状況による「ネ」の使用法を分析した。その分析の結果、環境だけではなく会話の参加者や内容から「ネ」の使用法が決まってくるのが分かった。また、今回の結果をもとに教室での会話練習への活用について検討したい。

43. 「国際理解教育」を踏まえた小学校と大学の協働—日本語教育の効果的な係わり方の模索例を通して—

大石寧子（徳島大学国際センター）

昨今、教育の場で「国際化」が掲げられているが、その多くは英語教育の導入に関するものと思われる。英語を多く導入すれば、国際化できるのだろうか。学生達の外に向ける目を養い、国際理解を促すために日本語教育はどう係われればいいのか。またこの状況の中で留学生達は何が学べるのだろうか。本学はもとより県内の教育機関でもその取り組みが始められているが、小学校ではまだその数は多くない。ここでは教育委員会との連携のもと、小学校の「国際理解教育」授業を通して児童と留学生との、またそれを支援する日本人学生サポーターとの協働とそこに向かうための日本事情の授業を事例として検証したい。

44. 日本語レベルが多様なクラスでの全文ディクテーションの試み

元田静（東海大学）

発表者は、多様な日本語レベルの学習者が混在する聴解のクラスを担当した。このようなクラスでは、教材の難易度を個別に調整することが難しい。そこで、ある1つの番組を教材とし、クラス全体で語彙説明、視聴、内容の確認をした後、音声ファイルを送付し、各自コンピュータを用いてナレーションの全文をディクテーションするという方法を試みた。その結果、学習者は自分たちのレベルに合わせて作業を進めることができた。さらに、モチベーションの向上、ワープロ機能による日本語学習の支援、各学習者の誤用傾向の可視化など、教師が予想していなかった効果が見られた。

45. 話し合いを通じた学びへの教師の介入を考える—振り返りの自由記述をクラスター分析した結果から—

佐々木良造（関西学院大学日本語教育センター）

筆者は、本学学部外国人留学生1年次の日本語科目として、自分と異なる意見を持つ人との円滑な意見の交換と資料に基づいた意見の論述を目的としたコースを設計した。本研究では、話し合いの振り返りの自由記述の分析から、学習者は、話し合いにおけるデータ・資料の必要性、他者理解の必要性、話し合いについてのマクロ的・ミクロ的な視点からの評価、テーマと授業意図の関連性への気づきが見られた。また、クラス間で話し合いのメンバーを入れ替えたことへのインパクトや教師が選択したテーマに対する反応が自由記述に見られた。こうした反応を教師の介入という視点から考える。

46. 話す活動に位置づけた知的書評合戦ビブリオバトルにおけるスピーチの特徴—独話的スピーチから聞き手を意識したスピーチへ—

菅原和夫・虫明美喜（東北大学高等教育開発推進センター）

話す活動としてのスピーチでは、自分の言いたいことが話せるようになることが重要とされる一方で、聞き手への意識の重要性も指摘されてきた。ところが、大半の学習者のスピーチでは話し手が一方的に話すだけで、聞き手が意識されたものにならないことが多い。本稿では、知的書評合戦ビブリオバトルを話す活動に取り入れ、そこで用いられる言語表現の働きを、表現類型をもとに検討する。ここでは、ビブリオバトルの際のスピーチが従来のスピーチと比較して、かなり聞き手を意識したものになっていることを示す。

#### 47. 統合的アプローチとしてのアドオン型授業デザインの提案

茂住和世（東京情報大学）

アカデミック・ジャパニーズの教育は日本語を媒介にした学習支援であると捉え直し、日本語という言語の学習と内容や知識の学習とを統合させる実践を行った。これは大島ら（2009）の示す「統合的アプローチ」によるコースデザインである。このプロセスデザインは一つのコースを複数のユニットで組み立てる「融合型」であり、学習項目の配列と課題の設定に特徴がある。本研究はこれをアドオン型と名付け、PowerPoint を使ってプレゼンテーションをすることの育成を目指した授業例を示しながら、新たな授業デザインを提案するものである。

#### 48. 理工系留学生のための化学の基礎的専門語

小宮千鶴子（早稲田大学）

大学の理工系学部で学ぶ留学生には、高校卒業程度の基礎的専門語の習得が必要だが、化学は物理や数学と比べて用語数が多く、学習負担が重い。そこで、本研究では化学の基礎的専門語を効率的に学習するための学習語彙の選定を試みた。中学と高校の化学を扱う3科目30種の教科書の索引を資料に、各科目の半数以上の索引に掲載された765語を選定した。それらは全体の約28%で、科目間の重複を除くと、高校「化学Ⅰ」529語が全体の7割弱を占め、以下、高校「化学Ⅱ」171語、中学「理科（第一分野）」65語だった。

#### 49. 学習者の自律学習を目指した発音学習

中川千恵子（早稲田大学）

筆者の担当する大学の中上級発音コースの目標は、コース終了後も自分で発音学習を続けられるようにすることである。そのために、発音に特化しない会話とスピーチの練習をしながら発音学習をし、最終課題では、自分で選んだ音声素材を文字化して練習後発表する。個別学習のためのツールとしては、OJAD（オンライン日本語アクセント辞書）内の韻律自動付与ツール「スズキクン」を紹介している。コース終了時には、5回～7回の発表音声を録音した音声ポートフォリオを聞いて自分の発音学習について考える振り返りレポートを書かせている。本発表では、このレポートを分析し、目標が達成されたか否か、また学習ツールが役に立つか等を分析する。

#### 50. 作文の自己修正を促すための教師フィードバックとピア・レスポンス—自律的な書き手となることを目指した中級日本語作文授業の実践報告—

内藤真理子（関西学院大学日本語教育センター）・中野陽（大阪府立大学大学院生）

本実践では、自律的な書き手へとなることをめざし、中級日本語学習者を対象とした作文クラスで、教師フィードバックとピア・レスポンスを組み合わせた実践を行った。教師フィードバックは、1) マーカーを引くことによる誤りの指摘、2) コメントによる誤りの指摘や改善への示唆、3) 作文全体へのアドバイス、4) ルーブリックによる評価の四つである。また、今回行った複数のピア・レスポンス活動のうち、本稿では「内容理解クイズ」を中心に述べる。これは、作文の書き手となった学習者が自身の作文に関するクイズを作る活動である。本稿では、第一稿と第二稿の比較、さらにフォローアップインタビューや「内容理解クイズ」の解答などから本実践の有効性を考察する。

#### 51. 談話におけるシテシマウの使用実態

李明華（早稲田大学日本語教育研究センター）

本稿では、日本語母語話者は実際の会話の中で、どのような文脈で、どのような出来事や事態に補助動詞シテシマウを使用して表現するのか、また、シテシマウの持つコミュニケーション上の機能とは何か、という問題意識をもって、日本語母語話者の談話における使用実態を調査した。調査の結果、今回収集した事例では、日本語母語話者は他人に関わる出来事や事態にはシテシマウをあまり使用せず、自分に関わる出来事にシテシマウを使

って、動作主である自分の行為や自分に関係する出来事や事態の実際の結果に対して「望ましくない」と「評価」していることがわかった。

52. 学習者がどのように議論スキルを向上させたか—「自律型対話」ディスカッション・トレーニング実践報告—

村上智子（立命館大学）

口頭表現能力を高めるには、コミュニケーション能力が総合的に発揮される場としてのディスカッションのトレーニングが有効であると考え、「自律型対話プログラム」の実践を行った。その特徴は、体験・指摘・分析・概念化という要素を含んだ参加体験型学習の手法によることと、話し合いのテーマ（内容）に関する学習と進め方（スキル）に関する学習の二つの軸から成り立っていることである。本稿では、まず、実践の概要を示し、実践を通して学習者がどのように議論のスキルを伸ばしたかの結果を報告する。さらに、参加体験型学習プログラムの有効性について述べる。

53. ペアワークを中心とした会話練習におけるインターアクション観察（3）—サンプル会話の「談話構造」「ターゲット文型」のタイプが活動に与える影響—

河内彩香・増田真理子・中原なおみ・竹山直子（東京大学日本語教育センター）

発表者らは、学習項目を含むサンプル会話を基に学習者ペアが新たな会話を作成する活動において、学習者間インターアクションや、その学びのプロセスを観察・報告してきた（中原他 2013、河内他 2013）。その過程で、個々のペアワークやクラス活動の活性化の度合いが、サンプル会話の談話構造やターゲットの学習項目の影響を受けて変容することが示唆された。そこで、本発表では、学習者ペアの録音記録の分析から、この活動における学びの成否に関わるサンプル会話の要素の抽出を行い、さらに、望ましいサンプル会話が具えるべき要件について考察した。

## 【会場案内】

### 横浜国立大学

<http://www.ynu.ac.jp/access/index.html>



### 横浜国立大学への主な交通機関 ※( )内は目安となる所要時間

#### JR 横浜駅より

横浜市営地下鉄 横浜駅→三ツ沢上町駅下車(4分)+正門まで徒歩 16分

横浜市営バス・神奈中バス・相鉄バス 横浜駅西口→岡沢町下車(15分)+正門まで徒歩 2分

(バス停留所案内 [http://www.ynu.ac.jp/access/pdf/bus\\_all.pdf](http://www.ynu.ac.jp/access/pdf/bus_all.pdf))

(土曜日は、学内乗り入れバスはありません)

#### JR 新横浜駅(新幹線)より

横浜市営地下鉄 新横浜駅→三ツ沢上町駅下車(7分)+正門まで徒歩 16分

#### 羽田空港より

京急空港線エアポート急行 羽田空港国内線ターミナル駅→横浜駅(約 30分)

## 【昼食について】

学内の食堂等は営業していません。お弁当等をご持参ください。バス停・岡沢町の前に「まいばすけっと」がありますが、それ以外、大学周辺に店はありません。

## 【懇親会】

閉会の挨拶の終了後、教育人間科学部第1研究棟にて懇親会を行います。

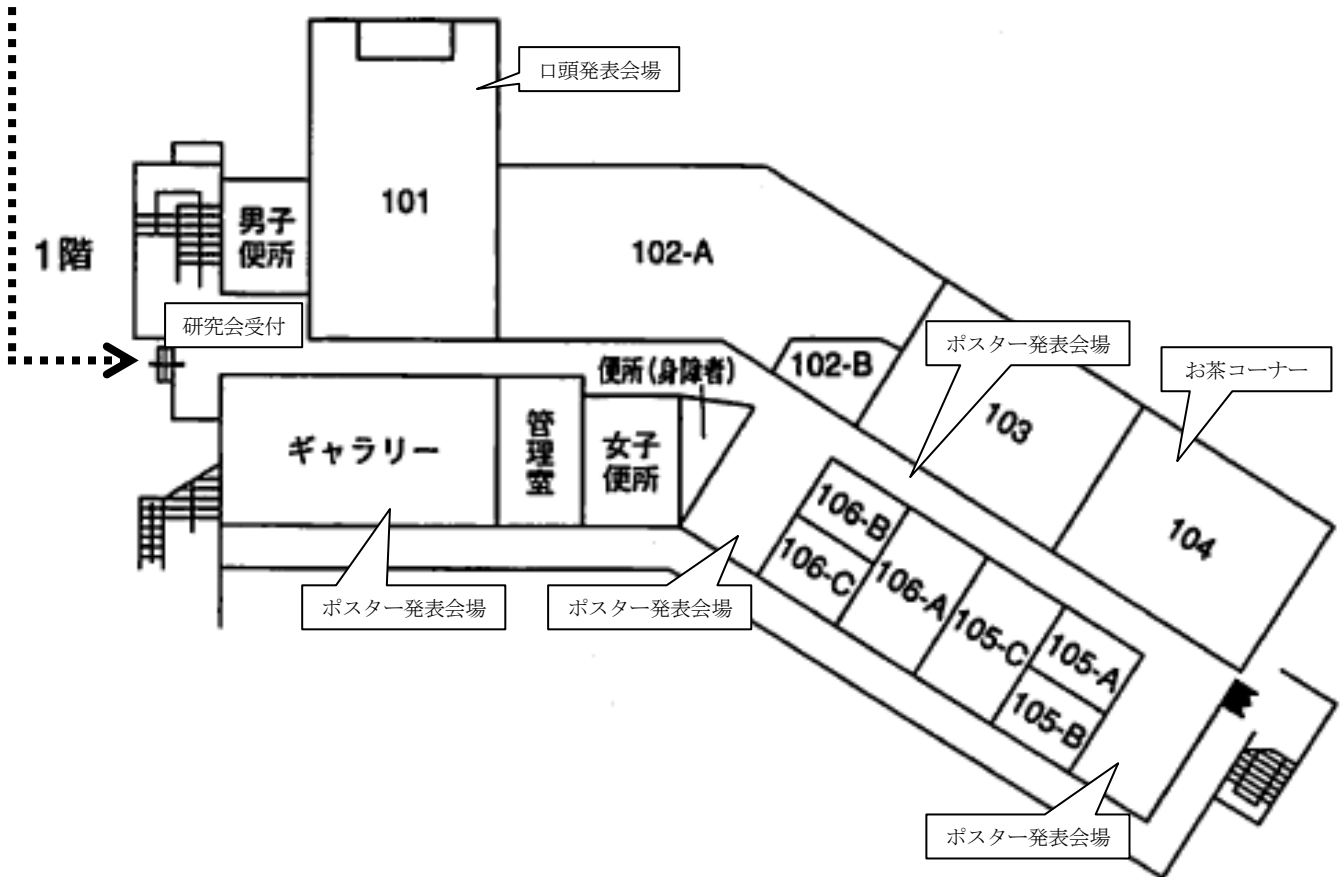
ぜひご参加ください。会費は2,500円です。

### ○キャンスマップ



○会場内案内図

教育人間科学部講義棟7号館



【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2014年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

- 【振込先】
- (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合  
記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会
  - (2) 銀行から振り込む場合  
銀行名：ゆうちょ銀行  
店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018  
預金種目：普通(または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能  
口座番号：6907651 口座名：日本語教育方法研究会